

E.サピアを読む (3)

—意味研究に係る“Grading”のより良き理解に向けて—

高橋 玄一郎

0. はじめに

本稿は、拙稿 (2022) の続編である。米国の人類学・言語学者 E.サピア (Edward Sapir)¹ の意味論三部作² の一つ、“Grading” (1944) をとりあげ、英語意味論・語用論、ひいては言語学、言語教育へさらに活かせる機縁をつかめるよう、批判的に読み進めることとする。便宜上、パラグラフごとに吟味していきたい。“Grading” の構成は、次の通りである (下線は引用者による)。

1. The Psychology of Grading
2. Degrees of Explicitness in Grading
3. Grading from Different Points of View
4. Implications of Movement in Grading
5. The Concept of Equality
6. The Classification of Types of Grading Judgment
7. Affect in Grading
8. The Superlative

本稿は、“Grading” の第 4 節 Implications of Movement in Grading と第 5 節 The Concept of Equality を取り扱う。以下、節ごとに吟味していく。

まず、第 4 節に至るまでの流れを簡単に振り返っておこう。

Sapir (1944)³ の第 1 節と第 2 節までにおいて、Grading に係る 4 つの明示性が考察され、第 2 節の終わり、以下の 4 つの枠組みが示された。

1. Implicitly gradable but ungraded: *house; houses*

¹ エドワード・サピアについては、たとえば、佐々木達・木原研三編 (1995) の Sapir, Edward の項を参照されたい。

² ここでいう「意味論三部作」とは通称で、“Grading” (1944) の他に、“Totality” (1930) と“The Expression of the Ending-Point Relations in English, French, and German” (1932) がある。いずれも、当時の国際補助語に関する組織的な検討が発端であったが、実質的には一般言語学的な趣きの濃い、普遍概念文法研究 (studies in universal conceptual grammar) となった。詳細は、Sapir (2008) 所収の Pierre Swiggers による “Introductory note” と John Lyons による “Introduction to Sapir’s texts “Totality,” “Grading,” and “The Expression of the Ending-Point Relations in English, French, and German” を参照されたい。なお、この J. Lyons の “Introduction” には、拙訳 (2020) がある。

³ Sapir (1944) のテキストは、初出誌をはじめ複数の資料から引用できるが、本稿では、Mandelbaum 編 *Selected Writings* に基づく。

2. Implicitly graded by quantification: *half of the house; a house 20 ft. wide; ten houses*
3. Quantified by implicit grading: *much of the house; a large house; many houses*
4. Explicitly graded and implicitly quantified: *more of the house (than); a larger house; more houses (than)*

(Sapir 1944: 124, 第2節第2パラグラフ ; 太字は引用者による)

Grading の全域をカバーするとみられる、これら4つの枠組の内容は、次の通りである (Sapir1944 cf. 拙稿 2021 の解釈表現を全体的に変更) :

1. 暗示的に段階別が可能となっているが、段階別になっていない
e.g. *house; houses*
2. 数量を定めることで、暗示的に段階別になっている
e.g. *half of the house; a house 20 ft. wide; ten houses*
3. 暗示的に段階別にすることで、数量を定めている
e.g. *much of the house; a large house⁴; many houses*
4. 明示的に段階別になっており、暗示的に数量を定めている
e.g. *more of the house (than); a larger house; more houses (than)*

以上を踏まえて、Sapir (1944) の第3節 “Grading from Different Points of View” に入ってゆく。

第3節のタイトルにある *Different Points of View* とは、論理的観点、心理的観点、そして、それらが統合される言語的観点を指している。Grading の考察にあたり、論理、心理、言語という、これら3つの観点が導入されることとなる。拙稿 (2022) の末尾にも触れたように、論理的、心理的、言語的という3種の Grading は、多くの示唆に富んだものであり、現時点でも十分に吟味しきれたとは言い切れないように思われる。しかし、少なくとも、人間が言語活動を通じて行う相対主義的なものの見方や考え方をよりよく理解し表現するために、これら3種の Grading は独創的な手立てとなっており、その独創性をさらによく理解しながら、サピアの知見を応用・活用していく余地がかなりある、と言えよう。

1. 第4節 Implications of Movement in Grading について

第4節冒頭のバラグラフから吟味していこう。

(1) The main operational concepts that we have used in developing our notions of grading up to this point have been: the successive envelopment of values by later ones (giving us a set of “lesses” in an open series); the establishment of a norm somewhere in such an open series; the placement of values “above” and “below”

⁴ *a large house* の場合、数量とは、「量」に相当する容積を表わすものと考えられよう。

this norm; the contrasting of specific gradable values which belong to the same class; the establishment of continuity between such contrasting values by means of intercalation; and certain implicit directional notions (upward, e.g. good : better, bad : less bad; downward, e.g. good : less good, bad : worse; contrary, e.g. good-better : bad-worse). (Sapir 1944: 134, 第4節第1パラグラフ; 下線は引用者による)

[概要: Grading の考察上、これまで用いてきた作業上の主要概念は6点あった: 1) 開いた連続体において、程度差のある意味 (values) が段階的に連続して包含されていくこと; 2) その連続体のどこかに基準が設定されること; 3) その基準を基に、上と下に意味が位置付けられること; 4) 同じ類のなかで、特定の段階性を持つ意味が対照づけられること; 5) そのような対照的な意味の間には、連続体が挿間 (intercalation) されること; 6) 方向性をもつ概念の示唆 (上向、下向)]

このパラグラフ (1) で言及された6つの概念は、Sapir (1944) の第3節における logical, psychological, linguistic という3つの観点からの Grading の考察上、必要不可欠なものであった。これら6つの概念のうち、最後にある6点目の「方向性を有する概念の示唆」を基点として、以下、第4節での議論が起こされる。

パラグラフの最終文で使われている *upward* と *downward* という言葉には原註があり、それは次のようなものである:

“Upward” and “downward” are used in the sense of “in the direction of increase” and “in the direction of decrease” respectively. This purely notional kinaesthesia **may be, and probably generally is**, strengthened by a concomitant spatial kinaesthesia. (Sapir 1944: 134; 太字は、引用者による)

[概要: *upward* と *downward* は、それぞれ、「増加の方向」と「減少の方向」を表している。この純粹に概念上の運動感覚は、おそらく、(言語の違いに関係なく) 一般的に、空間に関係して同時に生じる運動感覚 (a concomitant spatial kinaesthesia) によって強められるであろう]

この原註に示される *kinaesthesia* という言葉は、第4節 Implications of movement in grading が示すテーマに深く関係する心理・認知上の重要な概念であると思われる。そのため、ここで、Sapir 没後に生じた人間の認知活動を基盤とする言語学の潮流との関連性を指摘しておきたい。隠喩表現 (metaphors) というものが単なる言葉の綾ではなく、日常の経験や認識から理解され、創造されていくことを多彩に論じた Lakoff and Johnson (1980:14-21) は、方向づけの隠喩 (orientational metaphors) を論じる中で、空間上の方向づけが、深く隠喩表現と関係している点に言及している。

空間上の方向付けとは、例えば、上下 up-down, 内外 in-out, 前後 front-back, 離接 on-off, 深浅 deep-shallow, 中心・周縁 central-peripheral といったものである (Ibid.: 14)。彼らは、方向づけの隠喩を扱う際に、サピアと同様に、“spatialization” (空間化) という言葉を用いながら、身体的で、文化的、経験

的な基盤こそがメタファーの表現と理解を支える土台となっていることを主張している。たとえば、MORE IS UP, LESS IS DOWN という概念で括られるメタファーをはじめとする 10 の概念が、身体的かつ文化的、経験的基盤と相関していることを多くの事例を挙げながら論じている。サピアは、*kinaesthesia* (運動感覚) という言葉を用いて、言語の基盤となる認知機能へ言及しているものと思われる。ただ、身体的、文化的、経験的基盤の影響を相対的にどの程度受け得るものかについては、慎重な姿勢が示されている。それは、先のサピアによる註の最終文にみられる “*may be, and probably generally is*” という用心深い表現に現れているように思われる。

第 2 パラグラフに移ろう。

(2) The directional ideas so far employed have merely implied a consistent increase or decrease in value of the terms which are seriated and graded. Thus, of a set of terms “a, b, c, ..., n,” in which a is less than any of the terms “b, c, ..., n,” and b is less than any of terms “c, ..., n” and c is less than any of terms “... n,” and no term is more than n, we have established an upward grading direction, consistently from less to more, but the terms themselves are not necessarily thought of as having been arrived at either by moving up from a or down from, say, c. Logically, as mathematically, b increased from a = b decreased from c. Psychologically, however, and therefore also linguistically, the explicit or implicit trend is frequently in a specific direction. It is this tendency to slip kinaesthetic implications into speech, with the complicating effects of favorable affect linked with an upward trend and of unfavorable affect linked with a downward trend, that so often renders a purely logical analysis of speech insufficient or even misleading.

(Sapir 1944: 134, 第 4 節第 2 パラグラフ ; 下線は引用者による)

[概要：これまで用いられてきた方向を示す観念は、単に連続して配列されたり段階づけられたりした語の一貫した意味の増減を暗示してきたにすぎない。あるスケール上に言語要素 a, b, c, ...n が並んでおり、その間の意味の程度差が小さい順、もしくは大きい順に並んでいる場合、論理的 (すなわち数学的) には、*b increased from a = b decreased from c* という関係が成り立つが、心理的 (すなわち言語的) には、好ましい増減には上昇方向、好ましくない増減には下降方向といった特定の方向性がはたらく。そのような運動感覚的な暗示 (kinaesthetic implications) は、純粋に論理的な意味分析を不十分なものに、もしくは誤ったものに、してしまうことが往々にしてある]

このパラグラフ (2) の主張は、パラグラフ (1) の主張同様に、先に紹介した Lakoff and Johnson (1980) が取り上げる、具体の英語表現用例に裏付けられる GOOD IS UP; BAD IS DOWN という、下記のような指摘に呼応するように思われる。それは、程度の増減が、単純に多い・少ない、高い・低いということではなく、そのような増減、多寡、高低が、心理的な好ましさと相関しているという点にある。

GOOD IS UP; BAD IS DOWN (良は上方向; 悪は下方向)

e.g. Things are looking up. (事態は上向きだ、つまり、良好だ)

We hit a peak last year, but it's been downhill ever since. (昨年、頂上を極めたが、それ以来、下り坂だ: 最高の成果を収める; 不調続きだ)

Things are at an all-time low. (事態は、最低だ、つまり、悪い) cf. all-time high

He does high-quality work. (彼は高い水準の仕事をする、つまり、立派な仕事をする)

Physical basis for personal well-being: Happiness, health, life, and control—the things that principally characterize what is good for a person—are all up. (個人レベルの良好な状態に即した身体的基盤: 幸福、健康、人生といった、個人の良好面を主体として特徴づける事柄は、どれも上方向を示す。)

(Ibid.:16)

同様にサピアは、次のパラグラフ (3) で、*a few* と *few* の用い方を例にとり、心理的過程 (psychological process) としての *grading* について、運動感覚の観点から説明している。

(3) We can easily test the kinaesthetic aspect of grading by observing the latent direction and associated feeling tone of an implicitly graded term like “few.” If some one asks me “How many books have you?” I may answer “A few,” which is, on the whole, a static term which, though indefinite, takes the place of any fixed quantity, say 25, deemed small in this particular context. But if I answer “I have few books,” the questioner is likely to feel that I have said more than is necessary, for I have not only fixed the quantity, namely “a few,” but implicitly added the comment that I might be expected to have a larger number. In other words, “few” suggests grading downward from something more, while “a few” is essentially noncommittal on the score of direction of grading. The difference here in implicit grading is not one of magnitude, but of direction only. The psychological relation between “a few” and “few” is very similar to the psychological relation between “nearly” and “hardly,” which belong to the conceptual sphere of gauging.

(Sapir 1944: 134, 第4節第3パラグラフ)

[概要: *Grading* の観点から *a few* と *few* を観察するならば、*a few* には運動感覚的な方向性はなく、不定の数であっても、具体の定数に置き換えることが可能である。他方、*few* は定数を示すことはなく、「それ以上に多くはない」という下方への方向性のみがある。なお、*a few* と *few* の心理的な関係は、*nearly* と *hardly* の心理的な関係と酷似している]

Sapir (1944) に見られるサピアの語用論的視点については、すでに拙稿 (2020) でも指摘したことであるが、このパラグラフ (3) においても語用論的な見方、考え方が如実に示されている。何気ない具

体の場面が例示されるが、そこには具体の言語事象を捨象して得られる本質的な言語（ここでは具体的に、*a few* と *few*）の機能が鋭くあぶり出される構図となっている。具体の対話例を再現し、確認しておこう。

（場面その 1）

A: How many books have you ?

B: A few.

（場面その 2）

A: How many books have you?

B: I have few books.

場面その 1 において、A から蔵書数を尋ねられた B の返答について、*a few* が示す数は不定であっても、具体的な数を示すことが可能であるという（サピアによれば、たとえば、この特定の場面では少なくとも思われるが、25 冊）。

場面その 2 において、A からの問いに対する B の応答には、比較的多くの本を持っているのではないかと、相手（A）からある程度の蔵書数を期待されているという B の認識が、暗に示されているという。その意味で、B の応答にみられる発言は、A からの問いに対する応答に必要とされる内容以上の内容になっているという。これは日本文化から見た謙遜の場面とも受け取れる対話とみてよいであろうか。ここで *few* の機能として重要なのは、具体的に何冊あるかではなく、蔵書量の多さが下方の運動感覚的（kinaesthetic）な含意を含んでいる点であると考えられる。さしずめ、「さほどはありません」、くらいのニュアンスがあるように感じられる。言葉の論理のみにしばられない発話者の心理が言葉の運用と連動しているともいえよう。まさしく今日言うところの語用論的な解釈の可能性をサピアが語っているものと思われる。

さらに、運動感覚の面から *a few, few, quite a few* のふるまいを、次の第 4 パラグラフを通じて考えておこう。

(4) Can “a few” be given an upward trend? Not as simply and directly as the change to “few” gives a downward trend, but there are many contexts in which the upward trend is unmistakable. If I am told “You haven’t any books, have you?” and answer “Oh yes, I have a few,” there is likely to be a tonal peculiarity in the reply (upward melody of end of “few”) which suggests upward grading from zero. Language, in other words, here ekes out the notional and psychological need for an upward-tending quantitative term as best it can. If I use “quite” which has normally an upward-tending feeling tone, and say “Quite a few,” the kinaesthetic momentum carries me beyond the static “a few,” so that “quite a few” is well on toward “a considerable number.” (Sapir 1944: 134, 第 4 節第 4 パラグラフ ; 下線は引用者による)

[概要 : *a few, few, quite a few* に係る上・下方向の運動感覚的な示唆を扱っている。*a few* に上向傾向を示すことがありうるのかといえば、*few* が示す下方傾向ほどには直接的にあるわけではないが、*a few* に上向傾向が明白に表れるコンテキスト（場面・状況・文脈）は数多くある。そのようなコンテキストがあれば、*a few* 自体に *few* ほどの直接的な方向性がなくとも、言語は量的な面で上向方向の心理的な思いを伝えられるよう、音調の助けを借りてでも、できる限り補おうとするのである。また *a few* に、通常、上向指向の情調をもつとみられる *quite* を加えて、*quite a few* とすると、上向傾向に弾みがついて、「かなりの数」を示すこととなる]

ここでも、サピアの取り上げた具体の対話例を確認しておきたい。

（場面その3）

A: “You haven’t any books, have you?”

B: “Oh yes, I have a few,”

場面その3では、Aから「蔵書はないのですね」と話しかけられ、「いや、ありますよ」という際、サピアはBの返答に見られる *a few* の部分に、特殊な音調特性がある点について言及している。*few* の語末部分で音調が上がるとしており、それはゼロから数が増える（上向指向の）grading を暗示するとしている。コンテキストを考慮した現実のやりとりへの考察が、自然に記述されている点に注意を向けておきたい。また、パラグラフ(4)の最後に触れられている、*a few* に副詞 *quite* が加わることで、*quite a few* が “a considerable numberer” を意味すると言及するところで、サピアは *quite* には通例、上向指向の情調 (an upward-tending feeling tone) がある、と述べている。この点をよりよく理解するために、*OED*² で点検しておきたい。

*OED*² によれば、歴史的にみてフランス語由来の副詞 *quite* の語義は、以下のように記述されている：

I. 最大限の程度まで (Completely, wholly, altogether, entirely; to the fullest extent or degree).

(語の歴史的な使用経過：約1330年～)

上記I.では、動詞や分詞（特に過去分詞）ならびに前置詞句、副詞句、形容詞、副詞を、副詞 *quite* が修飾する際には、被修飾語句の意味が最大限引き出される形での解釈がおこなわれることが分かる（*OED*² *quite* に係る I. 1, 2, 3 の項目記述に基づく；具体の用例は割愛）。また、19世紀の終わり頃から会話体として、相手の発話内容に対する評価、同感、同意を表す用法 (e.g. *quite so*) が記録されている (Ibid.: I. 3d. の項目：Expressing appreciation of or agreement of a statement)。この同感、同意を表す用法の下地は、18世紀半ば頃にはすでに、表現の十分な正当性を肯定的に表す用法（下記の語義II.）と

して、出来上がっていたように見受けられる。

II. 実に；もつともなことには (Actually, really, truly, positively (implying that the case or circumstances are such as fully justify the use of the word or phrase thus qualified)

(語の歴史的な使用経過：1742年～)

OED²の語義 II.では、形容詞、過去分詞、ならびに、それらから派生される副詞、(不)定冠詞、名詞、動詞と *quite* を共起させるわけであるが、それは、語義 I.を踏まえて、語の使用者が、気持ちを込めて用いる心理的な用法とみることもできよう。その際、サピアのいうところの運動感覚的な認知作用が伴い、*grading*の上向指向性が情調の面から示されると考えられる。

*Grading*に伴う運動感覚的な側面を確かめる方法について、サピアはさらに、次のパラグラフ(5)で具体の追加用例をあげて考察を展開している。

(5) The kinaesthetic feeling of certain graded terms can easily be tested by trying to use them with terms whose kinaesthetic latency is of a different nature and noting the baffled effect they produce due to implied contradictions of movement. Thus, we can say “barely a few” or “hardly a few” because “a few” is conceived of as a fixed point in the neighborhood of which one can take up a position or toward which one can move, positively or negatively. But “nearly few” is baffling, and even amusing, for there is no fixed “few” to be near to. “Hardly few” is psychologically improper too, for “hardly” suggests a falling short, and inasmuch as “few” is downwardly oriented, it is hard to see how one can fall short of it. “Hardly few” has the same fantastic improbability as the concept of A moving on to a supposedly fixed point B, which it “hardly” expected to reach, and finding that B was actually moving toward A’s starting point, and eventually reaching it, without ever passing A. Again, “all but” requires a psychologically fixed term to complete it, e.g. “all but half,” “all but a few.” “All but few” suggests a remainder which is not even a remainder. Again, “all but quite a few,” even if “quite a few” is no more factually than a small proportion of the whole, is psychologically difficult because “quite a few” is no more static than “few.” The “all but” form is implicitly static, hence “all but few” and “all but quite a few” ring false, involving, as they do, down-tending and up-tending elements respectively.

(Sapir 1944: 134, 第4節 第4パラグラフ)

[概要：程度により段階づけられている語が有する運動感覚的な情調を容易に確かめるには、その語を別の運動感覚的な方向性の情調を持つ言葉と一緒に用いることで、運動感覚面で潜在的に生じる方向の違和感に気づけるかどうか（をみる、）という方法がある（例えば、*?nearly few*; *?hardly few*; *?all but few*; *?all but quite a few*などに生じる違和感）]

サピアは、まず運動感覚的に問題のないコロケーションとして、*barely, hardly, nearly, all but* という副詞表現は、それぞれ *a few* とは共起するが (i.e., *barely a few, hardly a few, nearly a few, all but a few*)、*few* との共起には違和感が生じるという (i.e., *?barely few, ?hardly few, ?nearly few, ?all but few*)。それは、目標となる定点が *a few* にはあるが、*few* にはないからである、としている。これらの副詞表現は、意味の足場となる目標上の定点があってはじめて機能し得る。*barely, hardly, nearly, all but* という副詞表現は、それらの語の意味が機能するうえで、それらの被修飾語の意味の中に定点を必要とする。その定点があってはじめて意味が機能するものと考えられる。

これらの語による共起可能な用例を、英語コーパス BNC から見ておこう (各用例の下線は、引用者による) :

- She moved with her family to East Germany when she was barely a few months old.

(BNC; 彼女が家族と共に西ドイツへ移住したのは、生後 2, 3 か月になったばかりの頃だった)

- ..., the online application form takes hardly a few minutes to fill.

(BNC; そのオンライン上の申込書は、記入するのに数分もかからない)

- ..., Saddam 's attacks on his own civilian populations left nearly a few hundred thousand corpses, even by conservative estimates.

(BNC; サダム自らの民間人への攻撃は、どんなに少なく見積もっても、数十万近くの犠牲者を出した)

- All but a few households in Britain relied for heating on solid fuel fires in the principal room, and few considered it necessary to heat bedrooms or bathrooms continuously, even in winter.

(BNC; 英国のほとんどすべての家庭は、主要な部屋の暖房上、固形燃料の火に頼るが、寝室やバスルームは、冬季でもひっきりなしに温め続けることを必要と考えている家庭は、ほぼなかった)

これらの用例にみられる副詞表現 *barely, hardly, nearly, all but* には、コロケーション上、いずれも、具体の定点が確認できる (先の用例の順にみれば、「生後 2, 3 か月になったばかりの頃」; 「数分かかるか、かからないかの時間」; 「数十万近くの遺体」; 「(具体の数を挙げることも可能な) 数家庭を除いたすべての世帯」)。これらの具体用例からも、*a few* には、文脈に応じた定点がありうるということが分かる。副詞表現 *barely, hardly, nearly, all but* と *few, a few* との共起関係が可能か否かについては、各々の語が有する潜在的な運動感覚の方向や性質によって説明できる点に留意しておきたい。副詞 *barely* と *hardly* は、具体の定点を目指しつつも、当該の定点にはたどり着かないため、意味の認識の方向性は、当該の定点にたどり着く方向性を有する *nearly* や *all but* が有する方向性とは、反対方向の

意味認識になると考えられる。このような考察は、言葉の使用上、一般認知的な能力に基づく認識が深く関わっていることの傍証の一部であるように思われる。

2. 第5節 The Concept of Equality について

第5節では、心理的な概念としての equality (同等、同一) というものを扱うこととなる。Grading というテーマの下で扱う equality という概念は、おのずから、静的なものでなく、動的なものであることが予想される。第4節で言及された kinaesthesia (運動感覚) という概念が一般的認知機能にもとづく認識と深くかかわるものであったことを踏まえれば、その延長線上で、この equality という概念を考察する流れとなるであろう。Equality を運動感覚的な認識の観点から動的に捉えるとは、どのようなことであろうか。では、さっそく見ていこう。

- (1) We are now in a position to arrive at a simple psychological conception of “equal to.” “Equal to” may be defined as the quantitative application of the qualitative “same as,” “more than” and “less than” being the two possible kinds of quantitative “different from.” But it seems more satisfactory, on the whole, to define “equal to” in a more negative spirit, as a more or less temporary point of passage or equilibrium between “more than” and “less than” or as a point of arrival in a scale in which the term which is to be graded is constantly increasing or diminishing. In other words, if we take q as defined to begin with, we can give meaning to $a = q$ by saying that: (1) a is less than q to begin with, gradually increases while still less than q, and is later found to be more than q, having passed through some point at which it was neither less than nor more than q; or (2) a is more than q to begin with, gradually decreases while still more than q, and is later found to be less than q, having passed through some point at which it was neither more than nor less than q; or (3) a is less than q to begin with, gradually increases while still less than q, and finally rests at some point at which it is neither less than nor more than q; or (4) a is more than q to begin with, gradually decreases while still more than q, and finally rests at some point at which it is neither more than nor less than q. These four types of equality may be classified as :

- I. Explicitly dynamic (1) While increasing toward and away from
(2) While decreasing toward and away from
- II. Implicitly dynamic (1) Having increased toward
(2) Having decreased toward

A fifth type of equality, that of kinaesthetic indifference, is the limiting or neutral type which alone is recognized in logic:

- III. Non-dynamic: Statically “equal to

So far are these psychological distinctions from being useless that, as a matter of fact, a little self-observation will soon convince one that it is hardly possible to conceive of equality except as a medium state or equilibrated state in an imagined back and forth of “more than” and “less than.” It is safe to say that if we had no experience of lesses increasing and of mores decreasing, one could have no tangible conception of how obviously distinct existents, occurrents, and modes could be said to be “equal to each other” in a given respect. (Sapir 1944: 135, 第 5 節 第 1 パラグラフ; 下線は引用者による)

[概要：二つの対象が同等であるということは、質の面で同等であるということ量を量から捉えることといえよう（その際、以上・以下をめぐる量的な違いが尺度となっている）。しかし、同等ということ逆の見方をすれば、同等とは、以上・以下の一時的な通過点、もしくは、以上・以下のつり合いが取れている状態（平衡状態）、すなわち、常に増・減の動きのあるスケール上の到達点である、とみるほうが、より同等の定義に合っているように思われる。こうした点を念頭において、運動感覚の面から二つの対象に係る動的な同等関係 $a = q$ が成り立つ経緯を考えると、4つの過程が考えられる。それらに加えて、運動感覚の認識によらずに、論理で捉えられる、動的ではない静的な、同等、 $a = q$ がある]

ここで示された計 5 つのタイプの equality (同等) に係る概念は、Sapir (1944) の第 6 節 (The Classification of Types of Grading Judgment) において、同等ではない諸概念 (以上・以下の観点からのもの) と共に扱われ、英語による Grading に係る問いと返答という形式で、具体の用例が紹介されている。本稿は、第 5 節までを取り扱うこととしており、第 6 節は次稿で取り上げる予定であるが、この際、第 6 節も一部参照しながら、先の 5 つの Equality 概念を仮考察しておきたい。以下、同等の概念に係る計 5 つのタイプに、便宜上 1 から 5 までの番号を付し、タイプ 1 からタイプ 5 までについて、サピアの対話用例 (cf. Sapir 1944: 138-139; 下線は引用者による) をみながら確認しておきたい。

I. Explicitly dynamic (明示的に動的な grading からみた同等)

(1) $a = q$ のタイプ 1 について

While increasing toward and away from:

この説明は、第 6 節では、“is equaling q, on its way from less to more” (a は、減から増の方向へ、q と同等になりつつある) と表現されている (Ibid.:138)。

e.g.

A: “How far has he run by now?”

B: “He has run (as much as) five miles”

$a = q$ のタイプ 1 なるものは、サピアによれば、例えば「今までどれだけ (の距離を) 走ったのか」、

という A の問いに対する B の応答に見られるという。すなわち、「5 マイルも走った」という B の応答は、この走者の走行予定距離全体からみれば、残り〇〇マイルが残っている、ということであり、その走行マイル数を、これから積み増していくところである、と解釈できる。

このコンテキストにおける *How far* との同等関係は、(*as much as*) *five miles* と結ばれている。

(2) a = q のタイプ 2 について

While decreasing toward and away from:

この説明は、第 6 節では、“is equaling q, on its way from more to less” (a は、増から減の方向へ、q と同等になりつつある) と表現されている (Ibid.:138)。

e.g.

A: “How much time can he count on to finish his job?”

B: “He has (just, still) five hours to finish his job”

a = q のタイプ 2 なるものは、サピアによれば、例えば、「彼が仕事を済ませるのに、どの程度の時間をあてにできるのか」、という A の問いに対する B の応答にみられるという。すなわち、「仕事を終えるのに、(ちょうど、まだ) 5 時間ある」という B の応答は、その持ち時間を仕事のために減らしていくことであり、使える時間は減っていく、と解釈できる。

このコンテキストにおける *How much time* との同等関係は、(*just, still*) *5 hours* と結ばれている。

II. Implicitly dynamic (暗示的に動的な grading からみた同等)

(1) a = q のタイプ 3 について

Having increased toward:

この説明は、第 6 節では、“is equal to q, having increased to it” (a は、減から増の方向へ動ききり、q と同等の状態にある) と表現されている (Ibid.:138)。

e.g.

A: “How far had he got when he stopped running?”

B: “He ran until he came to a point that was (just, as much as, already⁵) five miles from his starting point.”

a = q のタイプ 3 なるものは、サピアによれば、例えば、「その走者が棄権した時の走行距離はどの程度であったか」、という A の問いに対する B の応答にみられるという。すなわち、「出発点から (ち

⁵ ここにサピアによる原註がある (Sapir 1944: 139) : More idiomatic in German *schon*. 原註によれば、ドイツ語の副詞 *schon* の場合は、英語の副詞 *already* と比べて、more idiomatic であるという。この点の吟味は本稿では十分ではない。また、同じ英語でも、Grading というコンテキストの中で用いられる *just* や *already* や *as much as* といった副詞表現間にあるニュアンスの違いにも注意を要すると思われる。

ようど) 5 マイル走ったところまで」という B の応答は、零マイルから 5 マイル地点まで走り切ったところまでである (まだその先は数マイルあるけれども)、と解釈できる。言葉を変えれば、走るのをやめた時点で、何マイル走破していたかという、**5 マイル** (cf. ちょうど 5 マイル ; 5 マイルも ; とくに 5 マイルも) であった、と解釈してよいであろう。

このコンテキストにおける *How far* との同等関係は、(*just, as much as, already*) *5 miles* と結ばれている。

(2) $a = q$ のタイプ 4 について

Having decreased toward:

この説明は、第 6 節では、“is equal to q, having decreased to it” (a は、増から減の方向へ動ききり、q と同等の状態にある) と表現されている (Ibid.:138)。

e.g.

A: “How much could he still lift when he had to give up?”

B: “He got weaker and weaker until he could lift (just, only, no more than) 5 pounds.”

$a = q$ のタイプ 4 なるものは、サビアによれば、例えば、「重量挙げを棄権した時の重量はどの程度であったか」、という A の問いに対する B の応答にみられるという。すなわち、「力が徐々に薄れていって、とうとう 5 パウンド挙げたところまでで棄権に至った」という B の応答は、5 パウンドの重量で挙げ切ったところまでである、と解釈できる。つまり、この段階で 5 パウンド以上の重量上げはできず、この先の重量挙げの重量は、減じていく方向であるとみられる。

このコンテキストにおける *How much* との同等関係は、(*just, only, no more than*) *5 miles* と結ばれている。

($a = q$ のタイプ 5 について)

III. Non-dynamic: Statically “equal to” (動的ではない grading からみた同等 ; 静的に同等である状態)

この説明は、第 6 節では、“is equal to q” (a は、q と同等の状態にある) と表現されている (Ibid.:138)。

e.g.

X: “How far [a] is A from B?”

Y: “A is (just) five miles from B.”

$a = q$ のタイプ 5 なるものは、サビアによれば、例えば、「A (地点) は B (地点) から、どの程度の距離であるか」、という X の問いに対する Y の応答にみられるという。すなわち、「A は B から (ちょうど) 5 マイル離れている」という Y の応答は、地点 AB 間の距離が (ちょうど) 5 マイルである、と解釈できる。つまり、地点 A と地点 B の間隔は、5 マイル以上でも以下でもない、とみられる。こ

のコンテキストにおける *How far* との同等関係は、(*just*) *5 miles* と結ばれている。

以上、同等の概念を動的に 5 つのタイプに分けて論じている第 5 節の内容について、第 6 節からの具体用例を一部取り込みながら確認を行った。

この同等の概念は、語彙意味論における、いわゆる同義語や類義語の概念を再考する示唆を含んでいるように思われる。たとえば、Cruse (1986: 87) は、一般的な見地から、語義関係を *disjunction* (離接)、*overlap* (重複)、*inclusion* (包含)、*identity* (同等) という 4 つの概念で捉えているが、この見立てを動的に再考する機縁をサピアの同等の概念がもたらしてくれるように思われる。それは、意味論を踏まえつつも、当該の語義関係が、さまざまな具体の文脈、場面、状況といったコンテキストを前提とした意味の諸相を扱う語用論を射程に入れる考察の可能性を意味することとなろう。

3. おわりに

本稿は、Sapir (1944) の第 4 節 (*Implications of Movement in Grading*) と第 5 節 (*The Concept of Equality*) を取り上げ、*Grading* に本質的に潜在する運動感覚的な動き (*kinaesthetic movement*) に係る認識、ならびに、その観点から、*Grading* における 同等 (*equality*) とはいかなる概念として捉えうるのか、を中心に検討してきた。不足する議論や最近の新たな知見との関係は、また折を見て、補足・検討の機会を得ていきたい。

参考文献

- Cruse, D. Alan. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we Live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Sapir, Edward. 1944. "Grading: A Study in Semantics." *Philosophy of Science* 11: 21, pp. 93-116. Rpt. *Selected Writings of Edward Sapir in Language, Culture and Personality* (1949) (ed.) David G. Mandelbaum, University of California Press, pp.122-149. (Rpt. *Collected Works*. Vol. I (2008), pp. 447-470.)
- . 2008. *The Collected Works of Edward Sapir Vol I*. (ed.) Pierre Swiggers. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 佐々木 達・木原 研三 (編) . 1995. 『英語学人名辞典』東京：研究社.
- 高橋 玄一郎. 2020. 「E. Sapir 意味論三部作」への序説 (J. Lyons 2008) : E. Sapir 全集からの抄訳」, *Verba* (『鹿児島大学言語文化論集』) 43, pp. 57-66.
- . 2021. 「E.サピアを読む (1) —意味研究に係る “Grading” のより良き理解に向けて—」, *Verba* (『鹿児島大学言語文化論集』) 44, pp.10-23.
- . 2022. 「E.サピアを読む (2) —意味研究に係る “Grading” のより良き理解に向けて—」, *Verba* (『鹿児島大学言語文化論集』) 45, pp.1-19.

コーパス

British National Corpus

辞書

The Oxford English Dictionary, 2nd ed.